被災障害児どう支える

学びの場から

避難所に居づらい例も

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故では、発達障害のある子どもも数多く被災し、避難生活を強いられた。学校や地域に見守られ、新たな一歩を踏み出す家族がある一方、避難先で孤立を深める母親もいる。震災を通じ、地域の絆の大切さが浮き彫りになった。

■□■□■□■

発達障害のある子どもの多くは生活の変化が苦手だ。集団生活が苦痛な子も多く、避難所で騒いで家族が居づらくなるケースもあった。外見で障害の有無が分かりにくく「親のしつけが悪い」と誤解されることもある。

発達障害情報センターなどはこうした子を支援者に理解してもらうために対応例を紹介したリーフレットを作っている。

震災の被害を受けて、文部科学省の検討会は学校施設の在り方を議論。緊急提言で、学校を避難所にする際に「障害者の受け入れの配慮」を求めた。介助が必要な被災者を集める福祉避難所に特別支援学校を指定するなどの対応も必要とした。

宮城の特別支援学級

「この学校で良かった」

大きな揺れに見舞われたのは、自宅近くの小学校にいた時だ。宮城県石巻市の浅野雅子さん(39)は、知的障害を伴う自閉症で特別支援学級に通っていた長男敬志君(13)を迎えに行っていた。

薬を取りに一度帰宅。非常時でもいつも通りきちんと靴を脱ぐ息子に大声を上げてしまう。避難所の中学校に急いだ。

敬志君は環境の変化が苦手。3日過ごした教室食料不足の中、親戚は気を使ってくれたが、偏食気味の敬志君はあまり食べない。「わがまま言えないんだから」いらだち、不安が募る。言葉を理解しづらい敬志君の腕を思わずつねったことも。「誰も悪くないのに。つねっても何も変わらないのに」と涙が出た。

数日後、浅野さんは自分だけ自宅に戻り、片付けを始めた。好きなおもちゃやスケッチブックに囲まれ、笑う息子の姿を見たい一心だった。

安否確認に訪れた担任教諭は「教室には敬ちゃ

福島の児童デイサービス

避難した母の孤立防ぐ

部屋中に広げたおもちゃで遊ぶ子どもの笑いが響く。「来て良かった。震災の前と同じ顔している。見守る母親(30)がうれしそうに話した。

福島県会津若松市。2階建て住宅に児童デイサービス「はまっ子くらぶ」がある。原発事故で避難した障害児を地元の福祉施設だけでは受け入れきれず、8月に開所した。幼児や小学生ら約10人が運動や工作をし、遊ぶ。

福島県が事業主体で、全国児童発達支援協議会に運営を委託、無料で使える。現地スタッフに加え協議会加盟施設が交代で職員を派遣している。

妊娠中だった母親は長男(3)と次男(2)とともに、双葉町から避難。原発から3キロ余りの自宅には戻れず、4月に三男を出産。5月に猪苗代町のホテルへ。長男は余震におびえ、言葉の遅れがある次男は自閉症の傾向と診断された。

見知らぬ土地で不安な中、紹介されたのが「はまっ子くらぶ」。次男へのアドバイスを受け母親は「気が楽になった」。

大熊町から会津坂下町の実家に避難した別の母親(28)は、ダウン症の次男(2)が利用する。

大熊町では隣町の施設に通っていた。「伸びる所は伸ばしたい。今までやったことを途絶えさせたくなかった。ここなら安心できる」と話す。

現地スタッフの中村容子さん(26)は「知らない場所で親は環境の変化に戸惑う。子どもはいっぱい遊んでストレスを発散してほしい」と話す。

県の相談支援アドバイザー青柳百合子さん(30)によると、避難所で子どもが騒いだり休調を崩したりしても、相談先が分からず悩む保護者がいた。仮設住宅でも迷惑を心配し、アパートを探して出て行く人もいる。

青柳さんは「避難先を転々とし、地域のコミュニティーから外れてしまう」と孤立を心配する。「『はまっ子くらぶ』などで、一人じゃないことを伝えたい」と話す。

ただ「はまっ子くらぶ」は来年3月まで。避難生活の見通しは立たない。「残る人、去る人、双方を支援する場所をどれだけつくれるかが課題」と青柳さんは指摘した。

「はまっ子くらぶ」で過ごす男の子（中央）＝9月5日、福島県会津若松市

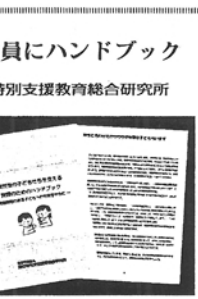
ルポ

■発達障害

発達障害者支援法ではコミュニケーションがうまく取れない自閉症、読み書きなど特定分野の習得が困難な学習障害（LD）、注意力に欠け動き回りがちな注意欠陥多動性障害（ADHD）、自閉症に近いが知的障害はないアスペルガー症候群などを発達障害と定義。脳機能の障害が原因とされるが詳しいメカニズムは分からない。文部科学省は小中学生の6.3%が該当する可能性があるとしている。

教員にハンドブック

特別支援教育総合研究所



国立特別支援教育総合研究所は5月、「震災後の子どもたちを支える教師のためのハンドブック」＝写真＝を作成、学校に配布した。

発達障害のある子が、震災のストレスでさらに大変な状況になっている場合もあると指摘。「特性に合ったかかわりで、少しでも気持ちの負担を減らしてあげることが大切」としている。

話を集中して聞くのが苦手な子には「指示を出す前に注意を引くよう声がけをする」「指示は短く」など具体的なアドバイスも載せ、「聞くことができた子どもたちを大いにほめて」と促す。

小さな音に過敏に反応する子の場合はヘッドホンの活用も提案。「いつもと同じ毎日がくるということが、子どもたちの安心につながる」と、震災前に近い環境づくりや生活リズムを意識することが重要としている。

担当した梅田真理総括研究員は「2～3年後に心理面で問題が起きることもある。時間の経過に合わせて息の長い支援が必要」と話している。